

中庭を介し、上と下でこんなコミュニケーションもできる。妻は土木エンジニアで、海外出張もあるなど多忙な毎日。「つかず離れずの同居」で両親に育児をサポートしてもらっている



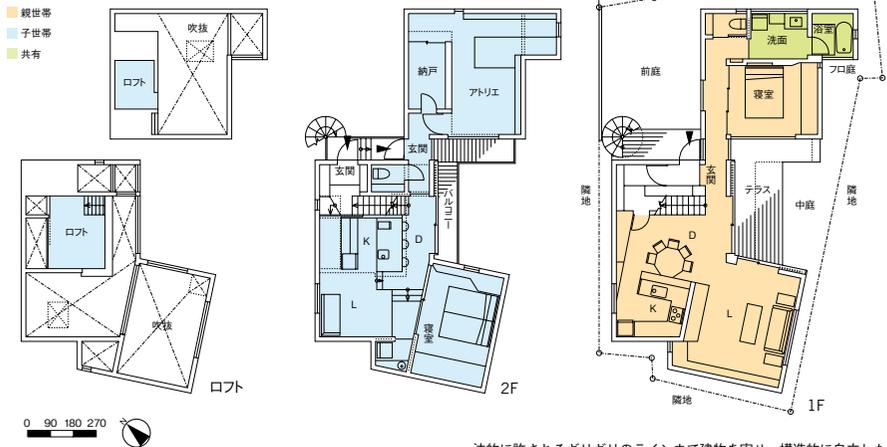
親世帯のLDKに全員集合。フルオープンサッシを全開すればLDKと中庭がバリアフリーで一体化し、旗竿地とは思えない開放感。右の階段は2階の子世帯につながり、家族はここから行き来する



桑田雄穂 // 撮影 岡部ルミ子 // 構成 文 tailground // デザイン

その2
建築家・岡本浩さんが考える
私たちの二世帯住宅
変形旗竿地に
光と風と緑を呼んで
気持ちよく暮らす

建築家の夫37歳、会社勤めの妻35歳、長女6歳。父と母はともに71歳。それまではどちらもマンション住まいをしていた二世帯が、横浜市内の住宅地に新たに土地を買って、新築計画がスタートした。敷地は安さが取り柄の変形旗竿地。ここに快適な家は建つのか？ 家族の未来は、娘婿である岡本浩さんの手腕にゆだねられた。



最初に見たとき、「夢も希望もない土地」と岡本さんはガッカリしたそうだが、今ではこのとおり。緑がいっぱいの中庭は、住宅密集地の中の小さな自然。家族の時間を豊かなものにしていく

法的に許されるギリギリのラインまで建物を寄せ、構造的に自立した2つの棟をずらして配置。玄関部分が渡り廊下のように2つの棟をつないでいる。ずらした棟の余白に前庭と中庭を確保。居室を中庭に向かって開き、プライバシーを守りつつ、内と外がつながる開放的な生活空間を実現している。1階はバリアフリーの親世帯、2階はスキップフロアの子世帯で、浴室を共有。玄関は別々だが、内階段で行き来ができる。



調理台兼ダイニングテーブルがある子世帯のDK。ここで親子3人、毎朝の朝食、週末の昼食と夕食を取る。「平日は生活を分けましょうということなので、キッチンが別々になりました」(妻)



敷地は住宅密集地だが、高台にあるので、眺望をあきらめず、超ミニサイズの展望塔を設けた。外観は屋根も壁もこげ茶だが、玄関のある前庭側だけは白い左官壁にして、明るい印象に。尾根道を思わせる前庭には笹や山野草、カツラを植えて季節の変化を楽しむ



ダイニングから居間へとゆるやかにつながる親世帯。インテリアに重厚な家具が映える。居間は天井が高く、南側に設けたハイサイドライトから、隣家の屋根越しに光を取り入れている

い生活を始めることになる。どうしても気持ちよく住んでもらえる家になければならなかった。両親は二世帯住宅を望んでいたわけではない。むしろその逆だったのだが、仕事と子育ての両立に苦戦する娘の手助けができればと、二世帯住宅に同意してくれた。さて、この旗竿敷地をどう使うのか。岡本さんの創意工夫の結果は、上の平面図で見ている通り。敷地の形状を生かした複雑な形の建物の余白に中庭と前庭がつくられ、敷地に潤いを与えている。建物の外壁は塀の役目も果たして内部を守り、居室は中庭に向かって開いている。プライバシーと開放感を両立させた巧みなプランだ。1階は親世帯、2階は子世帯と分かれてはいるが、上下は中階段でつながり、世帯間の距離は近い。



祖母と孫はよく一緒に時間を過ごす。「2人でのんびりな老後を考えていたのですが、孫のために思い切りました。でも、おかげで元気をもらっています。またお肉を食べるようになりました」(母)

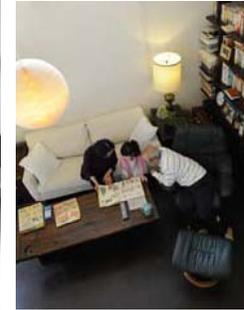
難点のある土地も
設計次第で楽園に変わる。
それを証明したかった。

建築的な工夫で変形旗竿地のデメリットを克服

晴れた休日。ウッドデッキのある中庭から、家族の声が聞こえている。ヤマボウシやヤマモモを植えた中庭は、小さいながらも里山の雑木林のようで、すぐ目の前に隣家があることを忘れさせる。「ここは通りから奥まっているので、車の音も聞こえないし、本当に静かですよ」(父)
「よく考えてみてくださいね。風通しがいいし、明るいし」(母)
娘婿である岡本浩さんの設計に、妻の両親も合格点をつけている。でも、最初にこの土地を見たとき、岡本さんは「これはだめだ」と思ったそう。駅から近い割に破格の安さは魅力だが、車も入れない袋小路の奥にあって、周りを家に囲まれている。日陰がでて、眺望も望めない。いったんはポツにしてほかを探したものの、予算に見合う土地は見つからず、1年ほど経ってこの土地のことを思い出したら、まだ売れ残っていた。44坪弱で建ぺい率50%。おまけに手ごわい変形旗竿地。それでもこの土地に決めた一番の理由は、二世帯の中で唯一の勤め人である妻の職場に近いことだった。
建築家として、二世帯の一員として、岡本さんの奮闘が始まった。妻の両親は住み慣れた都内のマンションを売却し、この土地で新し

「あみだくじ型」の本棚がインテリアと調和している。「段ボールに入っていた本が日の目を見てよかったわ」(母)。頑丈な木のテーブルはアメリカに住んでいたときに買った思い出の品

自由な同居、とでもいいですが、
半分分離スタイルを選びました



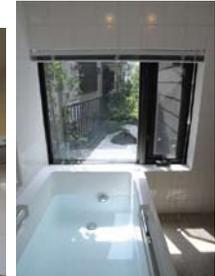
上 / 2階の小窓から見た親世帯。「気配が伝わる」以上に密な距離感で、半同居感覚。左 / 2階の床の段差が1階の天井高の差となって表れ、空間に変化が生まれている。「音はものすごくよく聞こえますよ」(父)。「だから便利だわ。呼ばばすぐに聞こえるし」(母)。一緒に住むと決めたのだから、何事も前向きに受け止めている

居間の一角につくられたコンパクトな父の書斎コーナー。変形敷地に沿って外壁を設けたことにより生まれたすき間スペースをうまく生かしている。上部の小窓は南北の通風を確保するのに有効。2階子世帯のこのスペースは、洗濯・洗面室として活用している



親世帯

親世帯の床は完全にバリアフリー。最寄り駅のホームから玄関まで階段なしで来られる。LDKと寝室は中庭に面していて開放的。2階のスキップフロアを反映した天井高の差を利用してハイサイドライトからの採光、通風を確保。天井高のギャップから生まれた小窓を上下のコミュニケーションに活用している。暖房は深夜電力で地面に熱をためる「土壌蓄熱放射式床暖房(サーマラフ)」を採用、おだやかな暖房効果を実現している。



上 / 窓の外にフロ庭を設けた二世帯共用の浴室。夜はスポットライトが苔山を照らす。浴槽に入浴しやすいように、手前側にはベンチと手すりを設け、座ったままシャワーが使えるなど、両親に配慮した設計になっている。左 / キッチンには居間から距離をおき、手元を高いカウンターで隠している。コの字型で動線が短く、母娘で使っても余裕の広さ。中庭の景色を眺めながら作業ができる

小窓から「こんにちは」。上と下はつながっている

二世帯住宅に住むようになって、両親の生活はにわかに活気づいた。親世帯のLDKは二世帯のファミリールームといってもいい。ウィークデーの夕食の仕度は母が担当し、小学1年生の孫は、若夫婦の帰宅を待たずに祖父母と食事をする。その代わり週末は別行動。そんな生活が定着している。

「生活を完全に分けてしまおうのな一緒に住む意味がない」と父は言い、中階段で行き来するプランに決まった。キッチンは別だが浴室は共用で、いわゆる完全分離型ではないが、1階は親世帯の個性がはつきり打ち出されている。

使い込んだ重厚な家具が似合うように、室内はセピアと白。居間の壁面に書棚を設け、蔵書がインテリアの一部になっている。デッキでゴルフの練習をしたいという父の要望も実現した。

「スイングを毎朝やっています。三方がガラスでしょう。自分のフォームが映るんですよ」(父)

壁の上部の3か所に子世帯に通じる小窓があつて、孫がしょっちゅう顔のぞかせる。「エリアを分けながらも、ところどころでさりげなくつながっている、つかず離れずの立体的な間取り」という岡本さんの設計意図が、こんな形で具体化されている。